

# 北九州市立大学 文学部紀要

第83号

## — 目 次 —

ニコライ・トルベツコイの論文翻訳 3

「本物のナショナリズムと偽りのナショナリズム」

「全ユーラシアナショナリズム」

… 芳之内 雄二 訳

北九州市立大学文学部  
比較文化学科  
2014

## ニコライ・トルベツコイの論文翻訳 3

芳之内 雄二 訳

翻訳に用いた底本は『Н.С.Трубецкой История・Культура・Язык』Москва, Прогресс, 1995である。「本物のナショナリズムと偽りのナショナリズム」はp114-125を、「全ユーラシアナショナリズム」はp417-427を使用した。前者の初出は1921年で、後者は1927年である。1926年には、ソ連国家の国際的な承認がなされ、国家社会形成が進行している時代であり、ここで問題にしているロシア民族にとってのナショナリズムは1921年のものとは全く異なっている。

これまですでにニコライ・トルベツコイの論文を北九州大学比較文化学科紀要として3本翻訳してきた。「ロシア文化の上層と下層」、「バベルの塔と言語混乱」、「ウクライナ問題について」である。私の興味関心は、どちらかというユーラシア主義者代表としてのトルベツコイではなく、文化論者、言語学者、人類学者としての彼の思想である。ニコライ・トルベツコイの論文内容は、抽象的概念を多用した文化・言語・民族に関する思想であるため、正直なところ翻訳に手間暇を要する。今回のナショナリズム論はこれまで翻訳したものと内容の上で関わりを持つので、併せて読んでいただければその要点理解の助けになると思う。

### 「本物のナショナリズムと偽りのナショナリズム」の要約

トルベツコイは、守るべき本物のナショナリズムと拒否すべき偽りのナショナリズムを区別する。前者はあるネイションにとって固有の文化を守り発展させるものであり、後者は現存のものとしては種類が多いとしている。後者のタイプには、第一に、独立のために非ヨーロッパ諸国が「本物のヨーロッパ人」に類似することを目指して独自文化を喪失するタイプのナショナリズムで独自文化喪失型ナショナリズムと呼べる、第二はネイション固有の伝統文化を世界で最も優れたものと自己評価して、それを他者に押し付ける自己中心主義を他者に押し付けるものでありショーヴィニズムである、第三はネイションの過去の伝統文化が変わらず継続していると見なして保守的にネイション文化を維持しようとする保守ナショナリズムに分類する。

彼の考え方はある意味では、文化本質論である。ところで、ネイションに固有の文化があることを論じるに際して、個々人には固有の性質特徴があることを根拠にする。個々人は自分の性質特徴を知りそれに基づいて行動することが人生の目的である、とトルベツコイは述べる、徹底して自己認識することにより自己の性質を他者に押し付けたり、他者から異質なものを受容することはしない。こうした個々人の自己認識は、個々人が所属する集合体としてのネイションの自己認識と相関している。このことからネイションの自己認識によってネイション固有の性質特徴が見出されるの

だ、とトルベツコイは説く。ただし、ネイションに固有の伝統的文化は、時代とともに変化しつつも、昔に形成された文化要素は後代にも引き継がれるとしている。伝統文化は変容しようとする観点から、文化本質論、保守的な伝統文化擁護主義とは異なる点である。

この論文では、多くの国やネイションのナショナリズムが批判の対象として挙げられている。まず初めに、自らの文化を人類でも優れていて普遍的なものとしようとするショーヴィニズムタイプの西欧ナショナリズム、そしてこの西欧の世界主義を受け入れて自己ネイションの独自性や文化を喪失の危機に追いやっている強国志向や独立志向の旧植民地や小国のナショナリズム、さらに自らの古代の出自を基とした文化を頑なに守ろうとするギリシャやルーマニアの時代錯誤的なナショナリズム、最後にロシアのナショナリズムについてピョートル大帝時代以降のものには、上の3種類すべてが見出せると指摘し、ロシアでの本物のナショナリズム創造のために知識人の意識変革の必要性がある、と説く。

#### 「全ユーラシアナショナリズム」の要約

ソ連を一つに統合する要因として共産党が率いるソ連は、社会主義の理想的理念を実現するといった共通性、もう一つはプロレタリアによる団結を挙げ、ナショナリズムは潜在的な分離主義と見なしている。だが、論者は、国家一体性の統合要素としてのプロレタリア独裁を否定する。被抑圧階級としてのプロレタリアは一時的現象であり、これまでは有効であったプロレタリア独裁理念は安定した永続的な問題解決にはならぬ、と指摘する。国家を強固に恒常的に団結するにはネイション基盤が必要であり、ソ連の国家基盤となりうるのは国内に住む諸ネイションの総体であり、それをユーラシア人と呼ぶ。

ユーラシア主義はこの地に住む諸ネイションの歴史、地理、経済の共通性によって結びついており、言語共同体、宗教共同体などへの帰属以上に社会的に必要で実用的価値がある、と述べる。そして、ユーラシア人自意識を再教育するためには歴史も含めて一連の新たな学術体系を建設する必要がある、と提言する。

## トルベツコイ著「本物のナショナリズムと偽りのナショナリズム」

自らの民族文化に対する人間の態度にはかなりな差異がある。ロマンス・ゲルマン人の態度は、自己中心主義と名付けうる特殊心理が動因となっている。「顕著な自己中心主義心理をもつ人間は自らを宇宙の中心、創造物の頂点、あらゆる生物の中で最も優れて完成されたもの、と無意識に思い込んでいる。二つの異なる存在があれば、彼により近くより類似した方が優れていて、かけ離れた方が劣っている、と見なす。従って、この人間が自然な結びつきを持つ全ての集団は彼によって最も完全なものとして認められる。彼の家族、彼の社会集団、彼の種族、彼の人種は残りの他のものより優れている (См. Мою книгу «Европа и Человечество» София, 1920г., изд. Российско-Болгарского книгоиздательство, с. 6) (参照拙著『ヨーロッパと人類』ソフィア、1920年、p6)。ロマンス・ゲルマン人にはこうした心理が徹底して染着しているので、まさにそれに依拠しつつ地球文化についてありとあらゆる独自評価を行っている。そこで、彼らは文化に対して二種類の態度を取る。一つは、世界で最高かつ完璧な文化は、自ら評価主体（ドイツ人、フランス人など）が帰属するネーション文化である、と認めるものである。或は、完璧の冠を授かるのはこうした一部ネーションのみでなく全てのロマンス・ゲルマン諸ネーションの共同作業によって創られたものであり、一部ネーションに代表される文化と近親関係にある総体文化である、と認めるものである。第一の態度はヨーロッパにおける狭義の排外主義（ドイツ排外主義、フランス排外主義など）と名付けうる。第二の態度は、より正確には「ロマンス・ゲルマン共通の排外主義」として意味付けることができる。ところで、「ロマンス・ゲルマン人は、自分たちのみが人間であり、自らを「人間」と、自らの文化を「全人類の文化」と、さらに自らのショーヴィニズムを「世界主義」と名付ける程度にいつも単純に自信を持っていた」（『ヨーロッパと人類』 p64）。

「ヨーロッパ」文化を摂取した非ロマンス・ゲルマン諸ネーションは、偏狭なエトノス性質を「全人類的文明」「世界主義」と宣伝する偽装文句にたぶらかされて、ロマンス・ゲルマン人から文化と一緒に通常その文化評価方法をも受入れている。そのせいでこうした諸ネーションの文化評価は自己中心主義でなくある種独特な「他者中心主義」—より正確には「ヨーロッパ中心主義」に基づいている。このヨーロッパ中心主義が西欧化した非ロマンス・ゲルマン人全てをいかなる破滅的結果に必然的に導く事になるのかについては、別の場所で言及した（『ヨーロッパと人類』第4章）。西欧化した非ロマンス・ゲルマンの知識人層がこの結果を回避できるとすれば、自己意識と文化の独自評価方法を根本的に変革して、西欧文明は全人類文化ではなく単に一部エトノス個体（ロマンス・ゲルマン人）のものであり、その文化は当該個体に必然なものである事をはっきり自覚することである。その変革の結果として、西欧化した非ロマンス・ゲルマン人の文化問題全般に対する態度が根本的に変化するはずであり、過去のヨーロッパ中心主義の評価は全く別の原則に基づく新たなものに替わるはずであ

る。

あらゆる非ロマンス・ゲルマン人の本分は第一に、あらゆる自己中心主義を克服することであり、第二に「全人類的文明」といった欺瞞に取込まれぬことであり、何がなんでも真のヨーロッパ人になるなどと志向せぬことである。この本分を二つの警句で定式化することができる — それは「自分自身を知れ」「自分自身であれ」である。

自己中心主義との闘争は自己認識によってのみ可能である。真の自己認識は、人間（あるいはネイション）に世界におけるその人の本当の場所を指示するものであり、その人は宇宙の中心でも、地上の中心でもないことを教える。だが、この自己認識は人を人々（あるいは諸ネイション）全体の本質把握へ導き、自らをよく知る者に限らず彼に類したいかなる者も中心や頂点ではない、という認識へ導く。自ら本来の性質を把握することにより人（あるいはネイション）は、自己認識を深めることで全ての人々と諸ネイションの価値が同等である、との自覚に至る。こうした把握の帰結となるのは自らの独自性確信、自ら自身であろうとする意欲である。それは、意欲のみでなく能力でもある。なぜなら自ら自身を認識せぬものは、自ら自身であることは不可能であり、自分自身になる能力も無いからである。

自らの本質を把握してこそ、決して自己矛盾に陥らず、自らも他者も偽ることなく、人は独自性を保持できる。こうした人の本質理解に基づく調和と統一の確立によってのみ、地上における到達可能な最高の幸福が存在する。同時に、その確立過程には道徳的本質が存在する。なぜなら、真に自己認識することによって、第一に良心の声をしみじみと深く感じるのであり、自己矛盾に決して陥らずに常に自らに正直であるように生きている人間は必ず道徳的になるはずだ。そこには当人にとって到達可能な精神的美しさがある。なぜなら、真の自己認識がなければ、自己欺瞞と内的矛盾のせいで人は必ず精神的に醜くなるからである。この自己認識こそ、現実的にも理論的にも人が到達しうる最高の知恵である。なぜなら、他のあらゆる知識は移ろい易く気苦勞が多いからである。最後に、自己認識に基づく独自性の確立によってのみ、人（とネイション）は地上における自らの任務遂行を実際に行い、何のために何によって創造されたのかを確信しうる。単純化して言えば、自己認識こそ地上における人間の唯一かつ最高の目的である。それは目的であるが、同時にまた手段でもある。

こうした考えは新しくはなく、きわめて古いものである。この考えはすでにソクラテスが23世紀前に表明しているが、ソクラテスは「自らを知れ」を自分で考え出したのではなく、デルフォイ神殿の碑文を読んで理解したのであった。ただ、ソクラテスは初めてこの考えを定式化して表現し、自己認識は倫理と論理の問題であり、それはあるべき思考行為であり、道徳的人生活動でもあることを最初に認識した。人生の行動規範「自らを知れ」は、あらゆる人に同一課題を与えているようだが、実際は各々に様々な課題を与えているものであり、この相対的、主体的及び絶対的、普遍的なものの統合結果こそは、時間的空間的な原理でありながらもエトノスと時代の区別なく全ての人々にとって等しく

受入れ可能な原理となるのに最適なものである。この原理は今日でもあらゆるネイションに有効である。地上に存在する宗教はどれ一つとしてソクラテスの人生規範を否定もせず排除もしていないこと、一部宗教がその規範を証拠立て深めていることを証明するのは困難ではない、さらに無神論者の考えの大部分はこの規範とまったく共存している<sup>1</sup>ことを説明することが可能である。だが、こうしたことをここで証明するのは直接目的から大きく逸脱したものとなる。

自己認識の結果が、自己を知ろうとする個人差のみでなく認識程度と形態によって様々なものとなりうることを指摘しておくことは重要である。キリスト教苦行者の行動は、罪の誘惑を克服し、神が人を創造したままのものになることを希求するものであり、本質的には神の恵みに導かれ絶えず祈ることによってなされる自己認識である。その自己認識は苦行者を、最高の道徳的完璧に導くだけでなく、存在と宇宙の価値を神秘的に洞察するに至らせる。ソクラテスの自己認識は、具体的な形而上学的内容は含んでいないが、心理的人格の調和へと導き、行動の賢明さ、さらに形而上学的問題上の完全な不可知論においてさえ人生問題における洞察力を与える。ある者の自己認識は論理的内省の優位さにおいて進行し、別の者の自己認識は不合理な直感の決定的関与において進行する。自己認識の形態はきわめて多様である。重要なのは、結果として自分自身について明確な、ある程度完全な認識が得られること、自らの本質を知り、その各要素の割合を知り、全体的結びつきにおける本質のそれぞれの現れをよく知るようになることである。

前述の全ては個人的自己認識のみでなく集団的自己認識にも当てはまる。ネイションを心理的統一、ある種の集団的人格と見なせば、彼らにとってある自己認識形態を可能性のある必須のものとする必要がある。自己認識は論理的に個人概念と関係している、個人がいるところでは自己認識があるはずである。そして仮に個人的生活範囲では自己認識が個々の人間にとって接近可能な幸福、到達可能な道徳性、精神的美德と英知すべてを含むものすべてが包括的目的だとすれば、こうした包括的原理としての自己認識はネイションの集団的個性にも当てはまる。この集団的個性の特性は、ネイションが何世紀もの間存在しその間常に変容していることであり、そこで、ある時代のネイションの自己認識結果は次の時代にはすでに現実のものでなくなっている、それでも先の認識結果は常に一定の土台を形成し、新たな自己認識行動の出発点をなす。

---

<sup>1</sup> 本質的には、人生規範としての「自分自身を知れ」は、ある程度の哲学的オプティミズムに基づいており、人の本性は善良であり、分別があり、素晴らしい、人生における全ての悪は人が自らの本性を十分に認識せず本性からの逸脱の結果である、との認知による。そこで、ソクラテスの規範は、極端な哲学的ペシミズムの同調者にとっては無論受け入れられないものである。例えば、全ての存在はまったく悪であり無意味で醜く苦しみと結びついていると見みなしている徹底した仏教徒は先験的にソクラテスの規範を拒否するはずだ。そのような仏教徒にとっての唯一の困難からの解決の道は自殺である、ただし魂の生まれ変わり教説によって不合理なものとなる肉体的な自殺ではなく、自らの精神的個性を抹殺する精神的自殺である、つまり仏教用語の「涅槃」、あるいは「徹底した生死の克服」である。だが、仏教徒の大部分は決してそれほど徹底した求道者ではなく、仏陀の一部基本的な教えを理論上認めるだけの域にとどまっている。事実上彼らは道徳に無関心な多神教追随者であり、彼ら自体は一定限度までソクラテスの規範を受け入れる可能性がある。

「自ら自身を知れ」と「自ら自身であれ」は同一命題の二つの側面を表す。外面的には、真の自己認識は当該個性の釣合い良い個性的な生活と活動において現れる。ネイションにおいては、それは個性的ネイション文化である。ネイションは、もしもその精神的本質、その個性的性格が個性的ネイション文化の中にもっとも完全で明白な表現を見出し、そしてその文化がまったく釣合いが取れている（つまり、文化の個々の部分が互いに矛盾していない）場合に、自己認識に至っているのである。こうした文化の創造こそがすべてのネイションの真の目的であり、また同様に当該ネイションに属する個々人の目的は、その個性的な精神的本質が完全に明白に調和が取れて具象化するような生活様式を獲得することである。この二つの課題、ネイションの課題と、その構成員である個々人の課題は互いに緊密に結びつき、互いにそれぞれを補い合い、条件付けている。

各人は自己の個人的自己認識に取り組むことで、併せて当該ネイションの代表としての自らを認識する。各人の精神生活には常に一定のナショナルな心理要素が内在している、そして当該ネイションの各個別代表者の気質は、個性に応じて様々な相互の結びつきにおいて、より特殊な特徴との関わりにおいて（個人的なもの、家族、階層）必ずやナショナルな性質特徴を有する。自己認識があれば、こうしたすべてのナショナルな性質特徴は個人的特質と全体との関わりにおいて自ら支持を得て、同時にまた洗練されたものとなる。そして、当人が自ら自身を知ることで「自分自身になる」ことを始めれば、彼は必ずそのネイションの顕著な代表者ともなるであろう。彼の人生は、意識的で独創的な個性の充満した調和の取れた現われであるので、必ず自らの中にナショナルな性質特徴を具現化する。もしこの人物が創造的文化活動に従事していれば、その創造物には彼の個性特徴が刻まれ、必ずやナショナルな性質を帯びることとなり、常にその性質に矛盾するものとはならない。だが、この人物が仮に文化的創造に積極的に関与せず、創造結果を消極的に受容しているだけとか、そのネイションの文化生活のある分野の担い手として参加している場合でさえ、ナショナルな性質の一定特徴が彼の人生と活動において完全かつ顕著に現れる事実（おもに趣味と傾向）は、当該ネイションの共通の生活様式を間違いなく強調し、補強することになる。ところで、生活様式とは文化財創造者にインスピレーションを与え、創造のための課題と素材を彼に提供するものである。このように個人的自己認識はネイション文化の独自性を助長する、その独自性とは、先に指摘したように、ナショナルな自己認識と相関関係にあるものである。

しかし、逆の場合もある。独自のネイション文化そのものが当該ネイションに属する個々人の個人的自己認識を促す。彼らにとって、その文化は共通ネイション気質の現われとなっている個人的気質特徴の理解と認識を容易ならしめる。なぜなら、真のネイション文化の中には全てのそうした特徴は明白で鮮明に現れているからである、この現れは各個人が容易に自らの中にその特徴を見出し、（文化を通して）ありのままの姿の特徴を認識し、日常生活全般でその特徴に正しい評価を与えることを可能ならしめる。釣り合いのある独自ネイション文化は当該全ネイションの各成員にとって、同時に

自分たちの同胞と常に交流していることで自分自身であること、自己を失わないでいることを可能ならしめている。そうした条件下で人間は自らのナショナルな文化生活に真摯な態度で参加しうる（心を偽ることなく、他者あるいは自己自身に対して過去にも将来にも彼が決して実際にあったことがないものでもって偽装することなく）。

これら全てから明らかのように、個人的自己認識とナショナルな自己認識との間にはこの上なく緊密な内的つながりと不断の相互作用が存在している。当該ネーションの中で「自分自身を認識」し、「自分自身である」人々が多いほど、ナショナルな自己認識と独自ネーション文化建設の働きがより順調に進み、そしてその文化が逆にまた個人的自己認識の成功と徹底の担保となる。個人的自己認識とナショナルな自己認識との間のこのような相互作用があつてこそネーション文化の正常な発展が可能なのである。さもなければ、ネーション文化はある箇所までどまったままとなり、他方で個別の個人的性格から成り立つナショナルな性質は変化することとなる。この場合には、独自ネーション文化の全ての意義は失われる。そうした文化はその担い手の心理に生き生きとした共感を呼ばず、ネーション精神の具現化となることを停止し、伝統的虚偽と見せかけに転化する、そうした偽りと見せかけは個人的自己認識と個人的独自性を容易ならしめず困難をもたらすだけである。

人間にとってこの世の最高の理想が徹底した完全な自己認識だと認めるならば、このような自己認識を促しうる文化のみが本物だと認めることとなろう。個人的自己認識を促すためには、文化はそれに関与する全員あるいは大多数にとって共通のものである心理的要素つまりネーション心理要素の総和を自らの中に具現化する必要がある。その際、そうした文化要素の具現化は明白に鮮明に行うべきである、なぜなら、それらの具現化がより明白であるほど、各個人は文化を通じて自らの中に文化要素を認識し易くなるからである。言い換えれば、まったく独自のネーション文化のみが本物であり、そうした文化のみが道徳的、美的、さらにはあらゆる文化に対して提起される実利的要求にさえも適うのである。もし、人間が「自分自身を知り」かつ「自分自身になった」場合にのみ、真に賢明で、高潔で、美しく、幸福であると認められうるとすれば、全く同じことがネーションにもあてはまる。「自分自身である」ことをネーションに当てはめれば、「独自ネーション文化を持つ」を意味する。仮に文化に対して「大多数の人々に最大限の幸福」を与えることを要求するとしても、そのことによつて事は変化しない。なぜなら、真の幸福は快適さや、あれこれの個人的欲求の充足にではなく、安定状態の中に、互いの精神生活の全要素の調和（欲求も含めて）にあるからである。いかなる文化もそれ自体がそうした幸福を人にもたらすものではない。なぜなら、幸福は人の外ではなく、人自身の内にあるからであり、幸福到達への唯一の道は自己認識だからである。文化は人間が幸福になる手助け、自己認識活動を容易にする助力となりうるだけである。ところで、そうしたことを成し遂げうるのは、前述したように、文化が徹底して鮮明に独自性をもって具現化されている場合のみである。

そういうわけで、文化は各ネーションにとって異なったものであるはずだ。自らのネーション文化の



中で、各ネーションは自らの全ての独自性を明白に発揮する—その際、その全ての文化要素が互いに調和し、ある共通のネーション特徴を帯びているはずである。それぞれのネーション、その文化の担い手のネーション心理の差異がより著しくなれば、それぞれのネーション文化相互の差異もより著しくなる。自らのナショナルな性質が互いに近い諸ネーションにおいては、文化も類似のものとなる。だが、全ネーションに同一の全人類的文化は不可能である。ナショナルな性質と心理タイプが雑多で多種多様なせいで、そうした「全人類的文化」は、精神的欲求をまったく無視してもっぱら物質的欲求の満足に矮小化するか、あるいはある偉大ネーションの気質から出てくる生活様式を全てのネーションに強制するであろう。いずれの場合も、この「全人類的文化」は、真のあらゆる文化に提起された要求に適うものとはならぬであろう。そうした文化は誰にも本当の幸福をもたらさぬであろう。

従って、全人類的文化への希求は排除されるはずである。逆に、各ネーションが独自のネーション文化を創り出そうとする希望は、完全な道徳的正当性を見出す。あらゆる文化的世界主義あるいは国際主義は激しい非難を浴びるであろう。ところで、必ずしも全てのナショナリズムが論理的、道徳的に正当な訳ではない。様々なナショナリズムが存在するが、一部は虚偽であり、一部は本物である、そして、本物のナショナリズムのみがネーションの行動にとって疑いなく好ましい原則である。

前述のことから、本物で、道徳的、論理的に正当化しようと承認されるのは、独自ネーション文化に依拠するか、あるいはそうした文化を目指すようなナショナリズムのみであることが明らかである。この文化に関する思想は真のナショナリストの全行動を支配すべきである。彼はこの思想を擁護し、そのために闘う。彼は独自ネーション文化を促進しうものすべてを支持するに違いなく、これを妨害するもの全てを排除するはずである。

ところで、もしもこのような物差しで現存するナショナリズム形態を扱うとすれば、多くの場合、ナショナリズムは本物でなく偽物であることが容易に確信できるであろう。

多く目にするナショナリストは、そのネーションのネーション文化の独自性をまったく重視していない者たちである。彼らナショナリストがただ望んでいるのは、是が非でも国家独立を獲得し、そのネーションが「大」ネーションや「強国」によって「国家ネーションファミリー」の平等メンバーとして承認されること、あらゆる競争裏で強国に類似することである。このタイプは様々なネーションにおいて見られるが、とりわけ少数派ネーション、それも非ロマンス・ゲルマンネーションによく出現する、そうしたナショナリストは特別異常で、滑稽なほどの形態をなしている。こうしたナショナリズムにおいては、自己認識は如何なる役目も果たしていない、なぜなら、そうしたナショナリズム提唱者たちは「自分自身」であることを全く希望しておらず、逆に、実際は大きくもなければ支配者でもないのに、「他者」、「偉大」、「支配者」であることを望んでいるからである。もしもある歴史的條件が形成されて、あるネーションが気質的に全く異なる他ネーションの統治下あるいは経済的支配下に置かれ、他ネーションの政治的経済的抑圧から自由になれなければ、独自ネーション文化の創造が不可

能な場合には、自由解放への希求、国家独立への希求はまったく根拠があり、理に適い、道徳的にも正当なものである。だが、こうした希求は、それが独自ネイション文化のために発揮される場合にのみ正当であることを常に覚えておくべきである、なぜなら、目的そのものとしての国家的独立は意味がないからである。ところが、今話題にしているナショナリストたちにとっては、国家独立と強国性はまさに目的そのものなのである。それどころか、この目的そのものために独自ネイション文化が犠牲として捧げられるのである。なぜなら、こうしたタイプのナショナリストは、彼が属するネイションが「本物のヨーロッパ人」に完全に類似することを目的に、そのネイションの気質にまったくそぐわぬロマンス・ゲルマンの国家形態・法律・経済活動ばかりでなく、ロマンス・ゲルマンのイデオロギー、芸術、物的生活様式さえしばしば押し付けているからである。ヨーロッパ化、すべての生活分野にロマンス・ゲルマン共通の手本を正確に複製しようと希求すること、それは結局、あらゆるナショナルな独自性の完全喪失をもたらし、そうしたナショナリストによって導かれているネイションにあつては、やがて悪名高い「母語」のみが独自のなものとして残る。しかも、この母語は、「国家」言語になり、新奇で馴染みのない概念と生活様式形態に順応することによりひどくゆがめられ、ロマンス・ゲルマンからの借用語と不体裁な新語を大量に受け入れることになる。結局、こうしたナショナリズムへの道に入った多くの「小」国家の公式「国家」言語は、いまだ脱ネイション化や（「民主政体全般」の程度までの）個性喪失にまでは至っていないネイション大衆にとって理解の届かぬものとなる。

ネイションの独自性を望まず、ネイションが自分自身になることを望まず、現存する「偉大な強国」に類似することのみを目指すこうした種類のナショナリズムを本物と認めることがまったく無理なことは明らかである。その根本にあるのは自己認識ではなく、本物の自己認識とは正反対の虚栄である。こうしたナショナリズム代表者、とりわけ少数派ネイションに属するこのタイプのナショナリストが好んで使う「ネイション自決」という用語は人を誤解させるものである。実際には、この思潮にはいかなる「ネイション的」なものも、いかなる「自決」もないのである。それゆえに、「自立」は世界主義、国際主義の要素を常に内包する社会主義と実にしばしば結びつくことは全く不思議ではないのである。

他のタイプの偽ナショナリズムは戦闘的ショーヴィニズムの形で出現する。この場合は、自らが属するネイションの言語と文化を可能な限り多くの他ネイションに波及させ、あらゆるネイション独自性喪失がなされている。この種のナショナリズムの虚偽性は特に説明せずとも明白である。なぜなら、文化とその創造者・担い手の心理的気質が調和している限りにおいて当該ネイション文化の独自性は貴重だからである。文化が異なった気質のネイションに広まり始めれば、文化の独自性の意味はすべて失われ、その意義自体が変化する。普及しようとする文化様式とその対象ネイション主体とのこの相関性を無視している点に、攻撃的ショーヴィニズムの根本的誤解がある。このショーヴィニズムは、虚栄と諸ネイションおよび文化の同等性否定に立脚し、つまりエゴセントリックな自己礼賛に基づき、本物のナショナルな自己認識は想像も及ばず、そのために真のナショナリズムの対立物である。

偽りのナショナリズムの特別形態として、文化的保守主義も認めておかねばならない。それは、ネイション独自性を過去に創造された文化的価値と生活様式形態であると無理に同一視するものであり、そうした過去のものがすでにナショナルな精神を満足に体现しなくなっている時にさえ変化を認めぬものである。このケースでは、攻撃的ショーヴィニズムにおけるのと同じく文化とその担い手の精神の時代毎の強い結びつきが無視されており、文化に付与されているのはネイションとは無関係な絶対的意義であり、「ネイションのための文化ではなく、文化のためのネイション」の考えである。このことでまたしても、果敢ないネイション自己認識の相関要素としての道徳的、論理的独自性の意味は消失する。

これまで検討してきた偽りのナショナリズムは全て、ネイション文化にとって破滅的結果をもたらすことになることを見て取るのは容易である。第一のものはナショナルな個性喪失、文化の脱ネイション化をもたらす。第二のものは、その文化の担い手の人種の純度喪失をもたらす。第三のものは、停滞と死の前兆を引き起こす。

これまで吟味してきた個々の偽ナショナリズムは互いに結びついて様々な混合タイプとなりうることは言うまでもない。それらは互いに全て、原則としてナショナルな自己認識に立脚しない共通特徴を持つ。だが、ナショナルな自己認識に立脚し、それによって独自ネイション文化を根拠付けたいと願っているようなナショナリズムでさえ、いつも本物であるとは限らない。問題は、非常にしばしば自己認識そのものがたいへん狭く解釈され、不適當になされていることである。本物の自己認識をしばしば妨げているのはあるラベルであり、当該ネイションがなぜか自らに貼り付け、どういう訳かそれを剥したくないと願っている。例えば、ルーマニア人の文化活動の方向性は、自らを「ロマンス系ネイション」と見なしていることになかなか程度条件付けられている。それは、彼らのナショナルな性質要素の中に非常に遠い昔にローマ軍兵士の小部隊がいたことを根拠にしている。まったく同様に、現在のギリシャのナショナリズムは、実質的に偽ナショナリズムの混合タイプであり、その本来の出自に関するギリシャ人の偏った見方により虚偽性を強めている。実際には、いくつかのネイション混成であり、他の「バルカン」諸ネイションと文化発展の一連の共通段階を共に歩んできたにもかかわらず、彼らは自らをもっぱら古代ギリシャ人の後裔と見なしている。こうした錯誤は、自己認識がこうしたケースでは全ていかげんに行われ、自己認識が当該ナショナリズムの源泉でなく、自立とショーヴィニズム傾向の史的根拠付けの試みにすぎないことに拠っている。

様々な偽ナショナリズムを観察すれば、本物のナショナリズムはいかにあるべきかを対照的に際立たせる。ナショナルな自己認識の論理的帰結から、真のナショナリズムは独自ネイション文化の必要性認識に完全に立脚するものであり、この文化を最高唯一の課題として提起する、そしてまさにこの主要課題の視点から内外政策のあらゆる出来事やネイション活動の各史的局面を意義付けする。

自己認識はネイションに一定の自己充足性を付与する。その自己認識は、独自のナショナル文化を

他ネイションに強制すること、精神的に異なるものの権威をもつ他ネイションを卑屈に模倣することに歯止めをかける。本物のナショナリストは他ネイションに対する自らの態度の中にかなるナショナルな虚栄心や功名心を持たぬものである。なぜなら、自己充足性のある自己認識に基づいて世界観を樹立しているのだから、真のナショナリストは他のすべての独自性に対して原則的に友好的で寛大だからである。そして、作為的なネイション孤立からも程遠い。真のナショナリストは自ら属するネイションの独自精神を明確かつ完全に把握しているので、自分たちの独自特徴に類似したものが他ネイションにあるかどうかを敏感に捉えるであろう。もしも、他ネイションがその特徴の一つによって何らかの文化的価値を見事に具現化している場合には、真のナショナリストは、その借用をためらわず、独自文化の共通財産目録に適応させる。互いに交流し、両方が真のナショナリストに率いられているナショナルな性質の近い二つのネイションは、まさにそうした自由交流により双方にとって許容しうる文化的価値によって互いに類似した文化を必ず有することになる。だが、この文化的一体性は、互いに隣接して生きるネイションの一つが他を征服した結果として現れる不自然な一体性とは原則的に異なっている。

こうしたすべての総括的考察に照らして、これまで存在したロシアのナショナリズムの数々について検討すれば、ピョートル大帝以降のロシアにおいて本物のナショナリズムは無かった、と認めざるを得ない。教養あるロシア人の大部分は「自分自身」であることを願わず、「本物のヨーロッパ人」になることを欲していた。そして、ロシアは、その願いにもかかわらず、どうしても本物のヨーロッパ国家になれぬために、我々の多くは自分たちの「後進的」祖国を軽蔑してきた。このため大部分のロシア知識人はごく最近まであらゆるナショナリズムを故意に避けてきた。別の者たちは、自らをナショナリストと名乗ったが、実際にはナショナリズムの名の下で、もっぱら強国主義、対外的な富国強兵、ロシアの輝かしい国際的立場を希求することと理解し、これら目的のためにロシア文化を西ヨーロッパ型に最大限近づけることが必要だと考えた。一部ロシア「ナショナリスト」における他ネイションの「ロシア化」要求は西欧へのこの追従的接し方に根拠がある。ロシア化とは、他ネイションの正教への改宗を奨励し、ロシア語を強制的に導入し、他ネイションの地理名称を不体裁なロシア語名称に変更することに集約されるものである。すべてこうしたことが行われたのは、ドイツ人がそのように行動しているからであり、「ドイツ人は文化的ネイション」だからという理由からである。時には、ナショナリストになろうとするこうした努力が（なぜならドイツ人はナショナリストだったので）深く計画的に考慮された形をなした。ドイツ人は自らのナショナリズムの尊大さを文化創造におけるゲルマン人種の功績を拠り所に主張しているので、我国のナショナリストは西ヨーロッパ型とはいくらか異なるもののロシア人あるいはロシア臣民のあらゆる創造の意義を半ば宇宙規模に誇張し、その創造を「世界的文明宝庫へのロシア天才の貴重な貢献」と表明して20世紀のあるロシア独自文化を同じく広めようと努めた。パン・ゲルマニズムに似た対応物として「パン・スラヴィズム」が創られ、スラヴ人

(言語的概念としての)が「文明化した諸ネイション家族の中」で「ふさわしい」あるいは「トップの」地位を占めることができるように、「世界発展の道を歩む」(つまり、自らの独自性をロマンス・ゲルマン型に置き換える)すべてのスラヴネイションを統合する使命がロシアに与えられた。西欧派の流れをくむスラヴ主義のこの思潮は、ロシアにおける革命前の直前時期に流行となり、「ナショナリズム」という用語が以前には妥当でないと見なされていた社会層にさえ広がった。

ところで、より古いスラヴ主義も真のナショナリズムの純粹形態と決して認めるわけにはいかない。そこに前述の偽ナショナリズムのすべての3タイプを見て取るのは困難ではない。その際、最初は第3タイプが優勢で、後に第1、第2タイプが優勢になった。ロシアのナショナリズムはロマンス・ゲルマンのモデル及びその類似物を基にして建設する傾向が常に見られた。こうしたすべての特性のために古いスラヴ主義は、その出発点に独自性感覚と民族的自己認識があったにもかかわらず、必然的に変質せざるをえなかったのである。こうした要素は、たぶん、十分には自覚もされず、定式化も不十分だった。

こういうわけで、本物のナショナリズムは、完全に自己認識に依拠し、自己認識のための独自精神によるロシア文化再建を要求するものであり、今日までロシアではもっぱら特殊個人の宿命にとどまっていた。社会的潮流としてのナショナリズムはまだ存在しなかった。将来それを創造しなければならぬ。そして、そのためには、我々が論文のはじめに述べたロシア知識人の完全な意識変革が必要である。

## トルベツコイ著「全ユーラシアナショナリズム」

## I

革命前、全ロシア国家領土の公式支配者はロシア人と認められていた。その際、ロシア人先住の地方と異民族先住の地方の間にはいかなる原則的差異もなかった。ロシア人は両地方の所有者であり支配者と見なされ、異民族は支配者ではなく単に同じ家に住む者と見なされていた。

革命期にこの事情に変化が起こった。革命後のある時期に生じた無政府状態の内戦期に、もしもロシア人が国家の唯一の支配者としての自らの立場を犠牲にして国家統一を行っていなければ、ロシアは国家崩壊の危機に瀕していた。と言う訳で、歴史的に避けがたい論理によりロシア人と異民族の以前の相互関係は壊れた。旧ロシア帝国の非ロシア諸ネイションは以前にない立場を獲得した。ロシア人は唯一の支配者ではなく、ロシア国家領土に住む対等な諸ネイションの一つとなった。確かにロシア人は、人口規模で他ネイション全てを凌駕し、何百年もの国家組織維持の伝統を持っているので、もちろん、国家領内の全ネイションの中で確かに最重要の役割を担っているし、また担うべきである。しかし、それはいずれにしても同居者の中の支配者ではなく、対等者の中の第一人者でしかない。

上述のロシア人の立場上のこうした変化は、われわれの祖国の将来について思いを抱くもの全員が考慮すべきである。革命プロセスで生じた旧ロシア帝国及び現ソ連の他の諸ネイションにおけるロシア人の新たな立場は一時的、過渡的なものに過ぎないなどと決して思ってはならない。現在、ソ連の非ロシアネイションに付与された権利はもはや剥奪されることはないだろう。時が経てば現行の立場は固まる。将来、こうした権利を剥奪、あるいは縮小しようとするれば、極めて猛烈な抵抗を呼び起こすであろう。もしもロシア人が国家領内に住む他ネイションの権利を強制的に剥奪したり縮小したりする道をこの先いつか進むとすれば、これら全ネイションとの長い苦しい戦いを自ら運命付け、彼ら全てを相手にした顕在的あるいは潜在的戦いの絶えざる状態を招くことになる。こうした戦いは、ロシアの敵にとって絶好の機会となり、旧ロシア帝国と現ソ連の個々の自立したネイションは、ロシア人の目論見に対する闘争において外国の支持と同盟を獲得することは疑いない。それは、さらに道徳的視点から、領内他ネイションの特権を奪い、狭めようとするロシア人の立場は極めて不利で、ほぼ擁護できないものとなる。旧ロシア帝国に住む非ロシアネイションの権利を奪取しようとする闘争の道徳的根拠が無いために、その闘争はまずロシア人自身の間で不人気となるだろう。その闘争の結果がいかなるものであれ、闘争の事実自体がショーヴィニズム自己肯定のためにロシア人の国家感覚の喪失となるだろう。他方で、それはいずれにしろ近い将来における国家崩壊の兆候となるだろう。

このように、革命期の旧ロシア帝国の諸ネイションが獲得した平等な権利を奪い、狭めることは問題にすべきではない。国家領内の唯一の主人がロシア人であったロシアは歴史的過去のものとなった。現在も、将来もロシア人は領内に住み、その統治に参加する対等な諸ネイションの一つにすぎないの

である。

国家におけるロシア人のこの立場変更はロシア人自意識に対して一連の問題提起をしている。これまでは、最も過激なロシアナショナリストでも愛国者でありえた。今日では、ロシア人が住む国家はもはや彼らの独占的所有ではなく、排他的ロシアナショナリズムは国家構成のバランスを失わせ、従って、国家統一を乱すことになる。ロシア人の自尊心の過度の高揚は国内他ネイションすべてをロシア人に敵対させ、ロシア人を彼らから孤立させることになる。かつては、ロシア人の極度の自尊心はロシア国家がそれを頼りうるものだったが、現在ではこの自尊心が極端にまで強まると、反国家的要因、国家一体性を作り出すのではなく解体する要因となりうる。ロシア人の国家における今日の役割において、過激ロシアナショナリズムはロシア人分離主義に結びつく、こうしたことは以前には想像も及ばなかったことだ。ロシア人が自分の国家で唯一の支配者となり、この国家そのものが完全不可分な所有権に基づいてもっぱらロシア人のものであることを望む極端なナショナリストは、現在の条件では、ロシアから全ての周辺地域が離脱すること、つまり、このロシアの国境はウラル・ロシア地方までの境界内の大ロシア人密集の領土になることに妥協しなければならない。こうした縮小した地理範囲においてのみこの過激ナショナリストの夢は実現可能である。このように、現在では過激ロシアナショナリストは国家的視点からすれば分離主義者、自主独立派であり、ウクライナ、グルジア、アゼルバイジャンなどのナショナリスト・分離主義者と全く同じである。

## II

かつては、ロシア帝国を一つの統一体に団結させる基本要因として、皇帝に率いられた国家の全領土が唯一の支配者ロシア人の所有になることであったが、現在ではこの事実は無くなった。そこで疑問が生じる。いったい他のいかなる要因が現在この国家の全構成体をひとつの統一体にまとめるのだろうか。

こうした統合要因として、ロシア革命は周知の社会的理想の実現を提案した。ソ連は、単に個々の共和国グループではなく、社会体制の同一理想の実現を目標とする社会主義共和国グループであり、そこでまさにこの理想の共通性によってすべてこれらの共和国を統一体にまとめるのである。

社会的理想及び、現在ソ連の全ての個々の構成体の国家意思が目指す方向の共通性は、当然、強力な統合要因である。もしも時代の変化により、この理想の性格が変化しても、社会正義の共通の理想及びこの理想へ向かう共通意志の必然的存在原理が現在ソ連に統合されている諸ネイション及び諸地方の国家体制の基盤として残るはずである。だが、様々な諸ネイションを一つの国家に統合するのにこの一つの要因のみで十分なのか、と問い質したい。実際のところ、ウズベク共和国とベラルーシ共和国は両者がある内政において同じ社会的理想達成を目指しているという事実からは、これら両共和国が同一国家の屋根の下に必ず統合するはずだという結論には決してならない。それどころか、こ

の事実からこれら両共和国が互いに敵対せず戦わぬという結論さえ出ないのである。社会的理想の共通性のみでは不十分であり、ソ連の個々の構成体のナショナリズム的分離主義的志向に対してさらに何かを対峙させるべきであることは明白である。

今日のソ連で、ナショナリズムと分離主義の対抗手段となっているのが常に危機に直面している労働者階級の階級嫌悪と連帯意識である。ソ連の構成体に参入している諸ネーションのメンバーの中で完全な主権を持つ市民と認められているのはプロレタリアのみである。そして、本質的に、ソビエト連邦そのものを統合形成しているのは諸ネーションというよりも、これら諸ネーションの中の労働者である。ソ連諸ネーションの労働者階級は権力を奪取し、自らの独裁権を発揮しつつも、同時にまた内外の敵（なぜなら社会主義はまだ到来してはいない、そして過渡期にはソ連国内でさえ資本家とブルジョアが存在を認めざるを得ない；国外では国際資本主義と帝国主義の支配下に置かれているその他すべての世界が存在）の脅威にさらされている自らを常に自覚している。そこで、敵の陰謀に対して奪取した権力を首尾よく守るためにソ連全ネーションの労働者は団結して一つの国家にまとまる必要がある。

ソ連存在の意義をこの視点で見ることによって、ソ連政府には分離主義との闘争の可能性が出てきている。分離主義者はソ連国家統一の解体を目指しているが、国家統一は労働者階級にとって奪取した権力を守るために必要である。従って、分離主義者は労働者階級の敵である。同じ理由で、ナショナリズムとも闘う可能性、必要性が生じている。なぜならナショナリズムは潜在的な分離主義と容易く解釈されるからである。さらに、マルクス主義理論によると労働者階級は、ブルジョアの属性でありブルジョア体制の産物であるナショナリスト的本能を持っていない。反ナショナリズム闘争は既に人民の注目がナショナルな感情領域から社会感情領域へと転換している事実そのものによって実行されている。あらゆるナショナリズムの前提であるネーション一体性意識は激しい階級的敵意によって引き裂かれ、他方、ナショナルな伝統の大部分はブルジョア社会体制、貴族的文化、または「宗教的偏見」との結びつきのため誹謗されている。それでも各ネーションの自尊心は、その居住する境界内で彼らの言語が公的地位を承認され、行政および他の官職ポストを同地域出身者が占め、その地域の公式名称に居住ネーション名がしばしば冠されることである程度満足させられた。

現在ソ連の全構成体を結びつけて一つの国家統一にまとめている要因はまたしても公的に認められた全国家領土の唯一の主権者の存在である、とすることができる。ただし、以前は皇帝に率いられたロシア人が公式の主権者と認められていたが、現在では、こうした主権者と見なされているのは、共産党に率いられたソ連全ネーションの中の労働者階級である。

### III

上述した現代の問題解決法の欠点は勿論明らかである。ソ連の大部分の諸ネーションについてプロ



レタリアとブルジョアジーとに区分をするのは全く無理、或は全く意義がなく作りものとなることについては言うまでもないことだが、特に強調すべきは、全てのこうした問題解決法そのものが独自の暫定性を内包していることである。実際、プロレタリアによって政権が奪取された諸国における国家統合はプロレタリアとその敵との闘争の現段階の視点でのみ目的に適ったものである。被抑圧階級としてのプロレタリア自体が、マルクス主義によれば、一時的現象であり克服すべきものである。階級闘争についてもまったく同じことを言わねばならない。このように、上述の問題解決においては、国家統一は何らかの基本的に安定的土台ではなく、基本的に暫定的、一時的な土台に基づいている。それは常識外れの事態、そしてまったく不健全な多くの現象を作り出している。自己の存在を擁護するために、中央政府はプロレタリアの脅威となっている危機感をわざと煽り、プロレタリアをブルジョア階級に敵対させる為、新ブルジョアを階級憎悪の対象として作り出さざるをえなくなっている。簡単に言えば、国家の唯一の支配者としての彼らの立場はきわめて不安定であるとの観念をプロレタリアの意識の中にいつも保たせておかざるを得ないということである。

この論文の課題は、ソ連の共産主義概念そのものを批判することではない。われわれはここでは、プロレタリア独裁理念をその一側面においてのみ、即ちソ連の全ネーションを一つの国家統一体に団結させ、ナショナリズム分離主義の潮流に対立する要因として検討するものである。この側面のプロレタリア独裁理念は、これまでは有効であったが、安定した永続的な問題解決にはなりえないことを認めるべきである。ソ連のネーションそれぞれのナショナリズムはそのネーションが自らの置かれた新たな状態に慣れるに従ってより強くなる。様々な民族言語における教育及び書き言葉の発達、そして行政及び他職務をまず地元民に置き換えることによって個々の地方におけるネーションの区別が顕著になり、地元インテリの中に「よそ者」との競争による嫉妬深い恐怖と自らの立場をより強くしようとすの願いを生んでいる。それと同時に、ソ連のそれぞれのネーション内部の階級間の間仕切りは著しくすり減り、階級対立は次第に色あせてきている。これら全てがソ連のそれぞれのネーションの分離傾向のナショナリズムを強化するために絶好の条件を作り出している。これに対抗するプロレタリア独裁理念は無力なものとなっている。政権の座についてプロレタリアは、共産主義理論によれば真のプロレタリアには欠如するはずのナショナリズム感情、しかもそれは時に極めて強い感情の所有者となっている。そして政権の座についてこうしたプロレタリアは国際プロレタリアの利害に関心を持つことが、共産主義理論によって考えられるよりもはるかに少ない。

このような訳で、プロレタリア独裁理念、プロレタリア連帯の形成、そして階級憎悪を焚きつけることは、結局ソ連諸ネーションのナショナリズム及び分離主義志向の強まりに対して役立たずな手段になるだろう。

#### IV

旧ロシア帝国構成体の国家統合原理に関する現在の問題解決法は、国家の階級的特質についてのマ

ルクス学説、そしてマルクス主義に特有な国家体制のネイション基盤に対する軽視から論理的結論として出てきている。しかし、この学説の支持者にとっては、一ネイションによる支配理念を一階級による独裁理念に置き換える、即ち国家体制のネイション基盤を階級基盤に置き換える以外に何も残っていないのだ、と見なさざるを得ない。この置き換えから、その後の全てのことが自ずと結論として出てくる。こういう訳で、共産主義者はいずれにしても民主派よりもはるかに正当で一貫性がある、民主派はロシア国家体制の単一ネイション基盤を否定しつつ、広範な地方自治或いは階級的独裁を伴わない連邦制度を唱道しているが、そうした条件下での統一国家存在はありえないことを理解していない。

旧ロシア帝国の個々の構成体が同一国家の構成体として存続するためには国家体制の統一基盤の存在が必要である。その基盤はナショナル（エトノス）なものあるいは階級的なものがありうる。その際、階級的基盤は、すでに上述したように、旧ロシア帝国の一部構成体を一時的に団結しうるのみである。強固にして恒常的な団結は、従って、エトノス（ネイション）的基盤の存在があるときにのみ可能である。革命前にはロシア人がそうした存在であった。しかし現在では、指摘したとおり、ロシア人が国家全領土の唯一の所有者であった状態に戻ることはもはや不可能である。この領土に住む他のいかなるネイションもまた全国家領土の唯一の所有者の役目を果たすことができぬことは同様に又明らかである。従って、ソビエト社会主義共和国連邦と呼ばれている国家のネイション基盤となりうるのはこの国家に住んでいる諸ネイションの総体のみである、それは特殊多ネイションと見なされ、独自ナショナリズムを持つ。

このネイションを我々はユーラシア人と、その領土をユーラシアと、そのナショナリズムをユーラシア主義と名付ける。

## V

あらゆるナショナリズムは当該エトノス組織に備わる強烈な個的本性感覚から生じている、だからこそ当該エトノス組織（ネイション、諸ネイショングループ或いはネイションの一部）の有機的一体性と独自性をまず第一に主張する。しかし、事実上この世には、完全に単一或いは均質なネイションは存在しない（或いはほとんど存在しない）。あらゆるネイションには、非常に小さいネイションであっても、いくつかの諸種族が常に存在し、言語、身体タイプ、気質、慣習などで互いにかなり異なっていることは珍しくない。又同じく、この世には全く他と異なるネイション或いは孤立ネイションは存在しない（あるいはほとんど存在しない）。各ネイションはある共通特徴によって結びつきがある諸ネイション集団に常に属している、他方で全く同一ネイションがある一連の特徴によってある諸ネイション集団に属し、なおかつ別の特徴によって他諸ネイション集団に属していることもしばしばである。エトノス組織の一体性はその組織規模に反比例し、エトノス組織の独自性は組織規模に正比例する、

ということが出来る。完全な均質性、完全な一体性に近づくのは最も小規模なエトノス組織（例えば、あるネイションの中の小種族）のみである、完全な独自性に近づくのは大規模エトノス組織（例えば、ある諸民族グループ）のみである。かくして、ナショナリズムは常にある程度まで当該エトノス組織の事実上の非均質性と非孤立性から抽象される、その抽象の度合いに応じて様々なナショナリズムを区別することができる。

前述のことから、各ナショナリズムには中央集権的要素（当該エトノス組織の一体化の主張）と分離主義的要素（当該エトノス組織の独自性及びより大きな組織からの孤立化の主張）が同時に存在していることが明らかである。さらに、あるエトノス組織が他の組織に帰属することから（ネイションは諸ネイション集団に帰属するが、他方で自らの中にはいくつかの諸種族或いは地方部族を包含している）、様々な振幅のナショナリズムが存在する、その際、これらナショナリズムはその対象となるエトノス組織に合わせて互いに同心円をなすような関係にあることが明らかである。最後に、同一ナショナリズムの中央集権的及び分離主義的要素は互いに排除し合わないが、同心円関係にある二つのナショナリズムの中央集権的及び分離的要素は互いに排除し合う。即ち、エトノス組織Aがエトノス組織Bの構成体として帰属しているとすれば、Aの分離主義的ナショナリズムはBの中央集権的ナショナリズムと互いに排除し合う。

かくして、当該エトノス組織のナショナリズムが純粋な分離主義に変質せぬようにする為には、その組織が帰属しているより大規模なエトノス組織のナショナリズムと結合する必要がある。ユーラシアに適用すれば、それはユーラシア（現在のCCC P）の各個別ネイションのナショナリズムは全ユーラシア、即ちユーラシア主義と結合すべきであることを意味する。ユーラシア国家の各市民は、自らがあるネイション（或いはその異種）に属していることのみでなく、そのネイション自体がユーラシア人に帰属することも自覚すべきである。そして、この市民のネイションとしての誇りはいずれの自覚においても同じく満足を見いだすはずである。こうしたことに基づいて、これら諸ネイション各々のナショナリズムが構築されるべきである。全ユーラシアナショナリズムはユーラシア諸ネイションの各ナショナリズムを拡大化した如きもの、これら全ての個別ナショナリズムのある種融合一体化した如きものとして現れるはずである。

## VI

ユーラシア諸ネイションの間には、無意識の引力と好意があることを条件に成り立ちうるある種の盟友関係（逆のケース、つまり二つのネイション間における無意識の排除と反感はユーラシアでは極めてまれである）が常に存在し、容易に確立されている。単なる無意識な感情だけでは、無論、不十分である。ユーラシア諸ネイションの兄弟関係が自覚した事実となり、しかも重要な事実となる必要がある。ユーラシア諸ネイションのそれぞれが自己認識しつつ、この兄弟関係において一定の立場を

占めるメンバーとしてまず第一に自己認識する必要がある。それにまた、ユーラシア諸ネイション兄弟関係へのその帰属意識は各ネイションにとって、他のいかなる諸ネイション集団への帰属意識よりも強く明確である必要がある。なぜなら、一連のある部分的特徴によって、ユーラシアの個々のネイションはある別の集団、純粋にユーラシア諸ネイション集団でないものにも帰属しうるからである。例えば、ロシア人は言語特徴からすればスラヴ諸ネイション集団に帰属し、タタール人、チュワシ人、チェレミス人その他はいわゆる「トウラン」諸ネイション集団に、タタール人、バシキール人、サルト人は宗教特徴からすればムスリム諸ネイション集団に帰属する。だが、列挙した全ての諸ネイションにとってこうした結びつきは、彼らをユーラシアファミリーに統合している結びつきに比べればより弱く明確さに乏しいものであるはずだ。ロシア人にとっての汎スラヴ主義も、ユーラシアのトウラン人の汎トウラン主義も、ユーラシアのムスリムにとっての汎イスラム主義もユーラシア主義ほど最重視されているはずはない。なぜなら、全てのこうした「汎・・・主義」は、個別諸ネイションのナショナリズムの遠心力を増強し、一連のある特徴によってのみ当該ネイションと他のある諸ネイションとの一面的結びつきを強調するものであり、従ってこれら諸ネイションからは現実的で活力のある多ネイション個体を作り出す能力がない。ユーラシア兄弟関係はというと、諸ネイションはあれこれの一面的な一連の特徴によってではなく、固有の歴史的運命の共通性によって結びついている。ユーラシアは、地理的、経済的、及び歴史的統一体である。ユーラシア諸ネイションの運命は互いにかみ合い、もはやほどこことができぬ一つの巨大な糸玉のようにしっかりと結びついている、そこでこの統一体からあるネイションを分離するのは自然に対する人為的暴力手段によってのみ実行可能であり、苦悩をもたらすはずである。汎スラヴ主義、汎トウラン主義あるいは汎イスラム主義の概念の基にある諸ネイション集団についてはこの様なことは何一つ言えない。これら集団の一つとして当該集団帰属諸ネイションの歴史的運命の共通性によって強固に団結していない。そこで、これら「汎主義」の一つとして、全ユーラシアナショナリズムと同じ程度に実用的に価値のあるものはものではない。このナショナリズムは実用的価値があるのみでなく、まったく社会的に必要なものである。なぜなら、我々は、多ネイションであるユーラシアネイション一体性の自意識の覚醒のみがロシア・ユーラシアに国家体制のエトノス基盤を与えうることをすでに見てきた。それなしでは国家体制は遅かれ早かれ解体し出し、すべての構成体の大いなる不幸と苦しみを伴う。

全ユーラシアナショナリズムがユーラシア国家統合の自らの役目を首尾よく遂行し得るためには、ユーラシア諸ネイションの自意識をそれ相応に育成しなおす必要がある。無論、そうした再育成は現実そのものがすでに取り組んでいる、ということができる。ユーラシア全ネイション（世界中で彼ら以外の、いかなるネイションも体験がない）はずで何年間も一緒に共産主義体制を体験している、という一つの事実がこれら全ネイションの間に数多の新たな心理的及び文化的歴史的結びつきを作り出し、全ネイションに対してその歴史的運命の共通性を明確かつ現実的に直接体験させている。だが、

これだけでは、無論少ない。多ネーションとしてのユーラシア人一体性を今やすでに明確に自覚している人々がその自らの信念を、各自が活動しているそのユーラシア人の中で唱道する必要がある。そこには、哲学者、社会評論家、詩人、作家、工芸家、音楽家及び様々な専門分野の学者にとって非常にたくさんの手つかずの仕事がある。多ネーションとしてのユーラシア人一体性の視点からすると一連の学問を見直し、古ぼけた学術体系の代わりに新たな体系を建設する必要がある。とりわけ、この視点からすると、全く新たに、ロシア人をも含めてユーラシア諸ネーションの歴史を建設せざるを得ない。ユーラシア多ネーションとしてのネーションのシンフォニー的調和一体性の目的志向をもったネーション自意識再教育の全活動において、おそらく、ロシア人はユーラシアの他のいかなるネーションよりも自らの力を多く傾けることとなろう。なぜなら、第一に、ロシア人は他ネーションよりも多く「ユーラシア世界の現実的コンテクストを無視してロシア人自意識を建設し、ユーラシア史全体からロシア人の過去を切り離してしまった古ぼけた方針及び視点に対して闘争することになる」からである。第二は、ロシア人は革命前までロシア・ユーラシアの全領土の主人であったが、現在はユーラシア諸ネーションの中で一番の存在であり（人口数と役割において）、当然、他のものに手本を示さなければならない。

ユーラシア主義者によるネーション自意識再教育の活動は、現在ではとりわけ困難な条件でなされている。ソ連の領内では、このような活動を公然と行うのは、無論、不可能である。移住者社会の中では、ロシア革命の客観的進歩とその結果を自己意識の中で現実化できぬ人々が圧倒的に多い。そうした人々にとっては、ロシア人によって征服され、完全不可分な所有権がロシア人にのみ帰属する一体領土としてのロシアが存在し続けている。こういう訳で、全ユーラシアナショナリズム創造の問題そのもの及び多ネーションであるユーラシア人の一体性創造をこれらの人々は理解することができない。彼らにとってユーラシア人は裏切り者である、なぜならロシアの概念をユーラシア概念に取り替えたからである。ユーラシア主義でなく現実生活がこの変更を惹き起こしたことを彼らは理解していない、現在の条件における彼らのロシアナショナリズムは単なる大ロシア分離主義にすぎぬこと、彼らが復活を願うもつばらロシア人のロシア国家は実際には周辺を全て切り離すことによるのみ、すなわち大ロシア人エトノスの範囲内でのみ可能であることを彼らは理解していない。別の移住者の潮流は逆方向からユーラシア主義を攻撃している、どんなネーション独自性も認定拒否を要求しており、彼らはロシア国家体制に単一エトノス基盤や単一の階級基盤をあてがわなくても、ヨーロッパデモクラシーを基盤にしてロシアを建設することができると考えている。ロシア知識人の古い世代の非現実的西欧主義気風の代表者として、こうした人々は、国家存在のためには何よりも初めに、その国家の市民が一つの統一体、有機的統一体への本質的帰属意識が必要であること、そうしたものとなりうるのはエトノス的なもの或いは階級的なもののみであること、このために現在の条件では二つの解決しないこと、即ちプロレタリアの独裁或いは多ネーションであるユーラシア人統一及び独自性の意識

と全ユーラシアナショナリズムであることを理解したがない。

JOURNAL  
OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
No. 83      March 2014

CONTENTS

Translation of N.S.Trubetskoï's works 3  
Real nationalism and false nationalism  
Pan-Eurasian nationalism

... Yuji YOSHINOCHI

The Department of Comparative Culture  
The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
2014